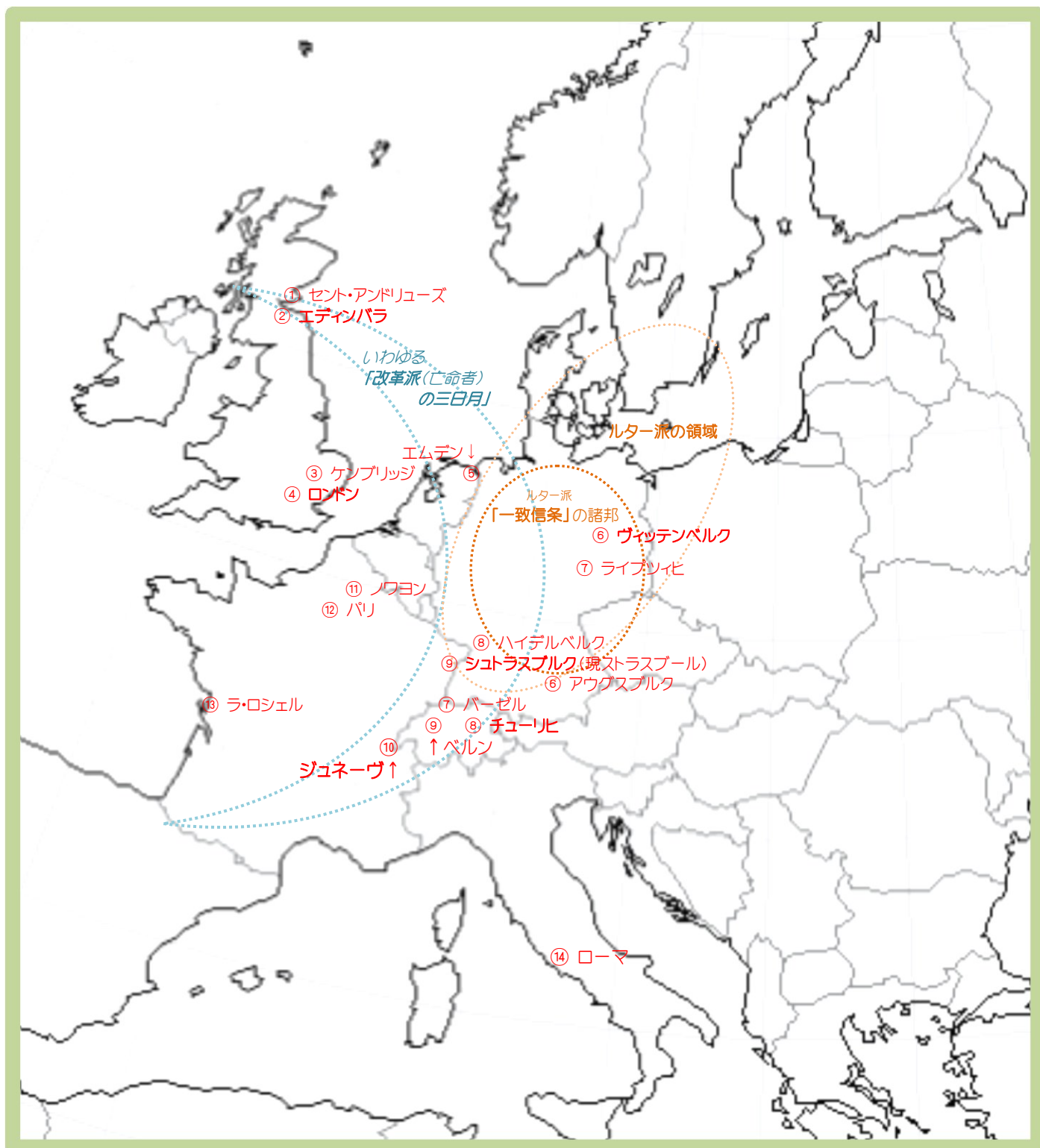


宗教改革 地図



CraftMAP (<http://www.craftmap.box-i.net/>) の白地図より作成

※ 薄い黒の境界線は、現代の国境。16-17 世紀当時の神聖ローマ帝国の領域は、現代のドイツ連邦より広いものでした。そこで、たとえば現在フランス語でストラスブールと呼ばれるアルザスの都市は、当時はドイツ語圏となります。本稿では、この都市を「シュトラスブルク」とドイツ語で表記しています。

※ 「ルター派の領域」および「改革派の三日月」は、1600年前後の状況を大づかみに示すもので、厳密ではありません。ルター派の領域では「一致信条」による教派形成が中心ですが、「ハイデルベルク信仰問答」など他の告白によって立つ町々もありました。また、ライン川沿いを中心に、ユグノーなどの亡命者が移動した領域を「改革派の三日月」としましたが、その全領域に改革派色があるわけではありません。また、線外にある地域（たとえばイングランド）の教会改革にも、亡命者たちは関わりました。

宗教改革



宗教改革の始めと終わり

ワルドー、ウィクリフ、フスやサヴォナローラといった先駆者を無視できないとしても、一般に宗教改革の始めといえば、**1517年10月31日、マルティン・ルター** (Martin Luther) がヴィッテンベルクの城教会の扉に「**九十五か条の提題**」を掲げたことが挙げられます。

これに対し、宗教改革の終わりは、ヨーロッパ諸国一つひとつを取り上げると難しくなりますが、ドイツを中心として見ると **1648年のウエストファリアの平和条約** といえます。これは三十年戦争を経て、

- ① ローマ・カトリック教会
- ② (ルターやメランヒトンに続く) ルター派教会
- ③ (ツヴィングリやカルヴァンに続く) 改革派教会

の三者が一応結んだ、平和共存の協定でした (一方、この和議では、いわゆる「(再)洗礼派」などの急進派をはじめ、上記の三者以外のどんな教派、分派も認められませんでした)。

青年ルター

ルターは、1483年11月10日、神聖ローマ帝国時代のアイスレーベン (ドイツ) で生まれ、1546年2月18日同じ町で死にました。ルターの生まれた頃、父ハンスはザクセン (中部ドイツ) の貧しい鉱夫でしたが、後にルターが誇りをもって叫んだように、先祖はもともと農民でした。

ハンスは息子を厳しく育てましたが、自らも勤勉な人で、銀採掘業を軌道にのせると、ルターが成長した頃には、市民の代表にもなる小資本家になっていました。

目次

宗教改革の始めと終わり	1
青年ルター	1~2
「塔の体験」	2
九十五か条の提題	3~4
ヴォルムスの帝国議会まで	4~5
ヴァルトブルク城の騎士	5
ヴォルムス以後のルター	6
スイスの宗教改革	7
ツヴィングリの生涯	8~10
ツヴィングリの聖餐の神学	11
メランヒトンの生涯	12~13
メランヒトンの神学的傾向	14
マルティン・ブツァー	16~17
カルヴァンの生い立ち	18
突然の回心	18
コップ事件	19
第一回ジュネーヴ滞在	19
シュトラスブルク時代	20
第二回ジュネーヴ滞在	21
カルヴァンの晩年と死	22
カルヴァンの神学	23
スコットランド宗教改革への道	24
ジョン・ノックスの生涯	25~26
イングランドの宗教改革	27
ヘンリー八世の分離政策	27~28
「ピューリタン王」エドワード	29
メアリー一世の時代	29
エリザベス一世と英国国教会	29~30
英国国教会の特色	30



ルターは、マグデブルク、アイゼナハの学校を経てエアフルト大学に入学（1501年）、四年後には文学士の学位を授けられ、さらに法学を学ぶことになりました。息子を法律家にするのは父の念願でした。ところがその年の7月、ルターは突然、エアフルトの修道院に入ります。動機はいろいろに伝えられていますが、最も有名な話によれば、6月末、父の家から大学に帰る途中に森で落雷に遭い「聖アンナよ、助けてください、わたしは修道士になりますから！」と誓ったというのです。彼が修道院に入ったのは21歳、「九十五か条の提題」を掲げたのは33歳の年でした。この間、彼は苦しい内的な闘いを続けながら研鑽を積み、23歳で司祭、28歳で神学博士号を得、ヴィッテンベルク大学の神学部教授となっています（1512年）。

“かつてわたしは「神の義」という言葉を憎んだが、今それを最も甘美な言葉として愛し、称えはじめ、その結果、この箇所(ロマ書1:16, 17)がわたしにとって、楽園の門になったのである。”

* コラム・宗教改革 *

アド・フォンテス～源泉へ

ルターは聖書を原典のギリシア語（新約）やヘブライ語（旧約）で読み、母語に翻訳しました。これには、ルネサンスの人文主義運動が影響を与えています。人文主義者たちは、「源泉へ（ad fontes）」というスローガンを掲げ、ギリシアやローマの古典をオリジナルの言語で読み、その文芸を復興することを求めました。当時のキリスト教人文主義を代表するデジデリウス・エラスムスは、新約聖書の複数のギリシア語写本を比較して校訂したギリシア語新約聖書を作成しました（1516年）。これが、ルター訳新約聖書（1522年）の「原典」とされたのです。一方ドイツ語圏スイスでは、ルターに先立って旧新約聖書全体の翻訳が完成しました（「チューリヒ聖書」1531）。こうして人々は、聖書の源泉から汲みだされた言葉を母語で読むことができるようになったのです

「塔の体験」

青年ルターの「内的な闘い」とは、道徳的な欠けや肉欲よりも、自らの罪の問題に対するものでした。何より恐ろしいのは、神の義と審きです。「わたしは、心を尽くし、精神を尽くし、魂を尽くして、主を愛することができない」。戒律をいくら厳しく守っても、彼が平安を得ることはありませんでした。

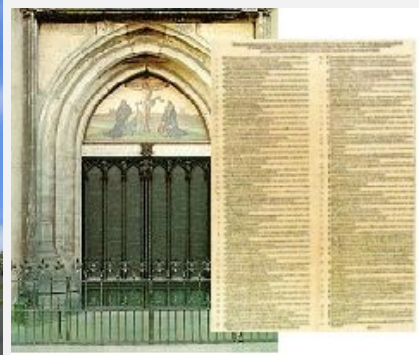
ある時、修道院長のシュタウピッツが、悩むルターに適切な助言を与えます。「イエスを見つめなさい、使徒信条の『罪のゆるし』の前に『わたしの』を入れて唱えるようにしなさい」。しかし、真の解決は、聖書の源泉*からくみ出されなければなりません。彼は24歳から大学で講義を始めましたが、1513年以降、詩篇、ローマ人への手紙、ガラテヤ書、ヘブル書、そしてもう一度詩篇を、それぞれ1年ないし2年をかけて講読しました。そこで、彼が恐れた神の義が、旧約聖書でも

「救い」の意味で用いられていると知り、新約聖書ローマ人への手紙（1章16、17節など）に、「信仰による義（信仰義認）」の福音の真理を発見したのです。「信仰を通して、神の義がわたしたちに与えられる。罪のゆるしと救いは個々人の功績とは関係なく、キリスト・イエスを信じる信仰のみを通して、ただ恵みとして与えられる！」。彼が聖書を読みふけた修道院の部屋は塔のようなところだったので、この福音の再発見を「塔の体験」といいます（この建物は、後にヴィッテンベルク大学神学部となり、今も残っています）。



九十五か条の提題 (1517年)

宗教改革の狼煙とよばれるラテン文の「九十五か条の提題」は、1517年10月31日ヴィッテンベルクの城教会の扉に掲げられたと語り伝えられています*。それは本来、贖宥状（いわゆる「免罪符」）による罪のゆるしの効力について神学論争をするための問題提起でした。しかし、これは一般に、ローマ・カトリック教会の教えの否定だと受け取られ、二週間以内にドイツ全国に、一か月以内に全ヨーロッパに伝えられ、あてにならない複製までできたそうです。カトリック教会が、お札を買えば罪がゆるされると教えたわけではありません。その教えはこうでした。神の恵みによって罪がゆるされても、罪の償いはしなければならぬ。ふつうの人間は、死ぬとき償いの負債を残すから、煉獄に往って償いを果たしてからでなくては、信仰があっても天国には往けない。しかし、聖人は、自分の償いより余分の功德を積み、教会にはそういう余剰功德が蓄積されているので、教皇がそれを分けて償いを免ずることができる。そこで、免罪の効力は煉獄にまで及ぶのだから、免罪符を買えば「賽銭箱の中で、小銭がチャリンと鳴るやいなや、誰かさんの魂は、煉獄からポンッと天国へ飛びあがる」（テツツェル談）というガラの悪い宣伝文句まで生まれたのです。



* コラム・宗教改革 *

提題と「自由な人」ルター

1531年10月31日付けで、ルターが、マインツの大司教アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク宛てに、「九十五か条の提題」を同封した手紙を送ったことが確かめられています。ブランデンブルクは、ヴィッテンベルク教会も属するマクデブルク教区の大司教でもありました。

興味深いことは、「ルター（Luther）」という名が、この手紙前後の時期に初めて本人によって使われ出したということです。それまで彼は、親から受け継いだとおりに「ルダ（Luder）」と自ら名乗っていました。当時の人文主義者たちの中で、ギリシア語に自分の名前を変えることが慣習となっていましたので、彼もその例にならって改名したのです。ルターは、ギリシア語の「エレウテリウス（Eleutherius）」という語からその名を導きだしたようです。それは、「自由な（人）」という意味をもつ、彼の新しい自己理解の込められた名前でした。

〔次のページに続く〕

同 1517 年 11 月 11 日付けの手紙には、ラテン語で「修士マルティヌス・エレウテリウス（自由人）、しかもなおまったくの僕、そして捕らわれ人」と著名されたものがあります。三年後に発表される『キリスト者の自由について』の冒頭に記された、有名な命題を思い起こさせます。

“キリスト者は、あらゆるものの、最も自由な主であって、何のものにも隷属していない。

キリスト者は、あらゆるものの、最も義務を負っている僕であって、すべてのものに隷属している。”

（著作集 352 頁）

「九十五か条の提題」は、この「自由な人」ルターの名とともに瞬く間にヨーロッパ各地に知られるところとなりました。ルターが当初求めていたものは教会や大学での「討論」です。しかし、ここからローマ教皇庁による「審問」のプロセスが始まり、多くの人々が議論に加わるや、世界史的出来事としての「宗教改革」が動き出すことになるのです。

（参考：小田部進一『ルターから今を考える』66-68 頁）



免罪符の販売は、教皇庁にとっては重要な財源でしたが、ドイツの諸侯にとっては、領民の金が、アルプスを越えてローマにまきあげられることです。だから、ルターの領主ザクセンの選帝侯フリードリヒ賢侯は、経済的な理由から、領内での免罪符の販売を禁止していました。しかし、ルターは、当時は、免罪符販売のからくりや不正をまだよく知らなかったようで、純粹に、民衆が真剣に罪を悔い改めなくなることを憂えたのでした。九十五か条の第一条には「わたしたちの主であり師であるイエス・キリストが『悔い改めよ』〔マタイ 4:17〕と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである」とあります。

ルターの「否」は、ドイツ国民全体から支持されました。人文主義者も、騎士も、農民も彼を支持しました。彼が「福音主義」のために立ち上がるべきときが、刻一刻と近づいていました。

ヴォルムスの帝国議会（1521年）まで

さて、論争があまりにも激化したため、これを鎮静化すべく、公的機関による審議や諸侯主催の公開討論会が開かれることになりました。アウグスブルクにおけるカエタヌスの審問（1518年）、ミルティッツとの会談（1519年）を経て、同年ライプツィヒにおいて、ヨハン・エックとの討論が行われました。これは、宗教改革にとっても、ルター自身にとっても重要な意義をもっています。すなわち、ルターはこの時、公会議も誤りを犯しうることを認め、彼自身のうちに聖書主義を確立しました。

このような闘いの中で、1520年には、宗教改革の三大文書といわれる「ドイツ国民たるキリスト者貴族に与う」「教会のバビロン捕囚について」「キリスト者の自由について」を著しました。また「善きわざについて（の説教）」も、この年に出版されました。

対するパリ大学は彼を断罪し、教皇レオ十世の全面撤回要求を拒否したルターは、翌21年教皇庁からも破門宣告を受けました。すると、ルターは教皇の最後通牒同様その破門状すら公然と焼き捨てたのです。ここに至り、神聖ローマ帝国皇帝が介入を決断します。

改革原理と5つの「のみ」

宗教改革の3つの原理といえば、

- ① 聖書のみ
- ② 信仰のみ
- ③ 万人祭司

です。このうち①を形式原理、②を内容原理ということがあります。これらは単なる抽象的原理ではなく、福音主義の教会を建てる柱として、当時のローマ・カトリック教会の教えを退け、これと戦う根拠となりました。

まず、①の「聖書主義」は、カトリックのように聖書と伝統を同等に並列することを退け、「**聖書のみ (Sola scriptura)**」が唯一の権威であると主張します。ただし、あらゆる伝統を否定するのではなく、聖書をものさしに正しいと認められる限り、信条や聖書的伝統を受け入れます。そこで信条や信仰告白は、聖書によって「規範される規範」と呼ばれます。

その聖書のみの内容に関して、福音主義は、カトリックの「善きわざによる義化(成義)」に対して、神の一方的な「**恵みのみ (Sola gratia)**」「**キリストのみ (Solus Christus)**」による救いを信じる「**信仰のみ (Sola fide)**」によって**義とされる**」と主張します。そこで、免罪符の根拠になる功德思想も退けます。

③の「万人祭司」は、教皇を頂点としたピラミッド型の聖職位階制に対し、信仰者はだれもが祭司の務めを持っていることを主張します。すべてのキリスト者が主を崇め、「**神にのみ栄光を (Soli Deo Gloria)**」帰すのです。ただし、万人祭司だから教職はいらないという無教会主義の主張は、賜物に応じた職務を重んじた宗教改革の教会観とは違います。

ヴォルムス以後のルター

ルターがヴァルトブルク城にかくまわれているとき、ヴィッテンベルクは、急進派によって進められた改革で混乱に陥りました。そのため、ルターはいのちがけでヴィッテンベルクに帰りました。

その後のルターは、カトリックと急進派という二つの敵と戦うことになります。また、騎士の反乱やドイツ農民戦争など、世を揺るがしルターを悩ます問題はあとをたちませんでした。

しばしばかんしゃく持ちでもあったルターは、体制に反旗を翻^{ひるがえ}した農民たちとぶつかりました。ユダヤ人など異教徒に、ひどい言葉もはきました。カタリーナ・フォン・ボラと結婚して幸せな家庭を築き、善き夫、善き父であったことが残される手紙や「**卓上語録**」から知られるルターですが、いずれにせよ彼もまた、ひとりの欠けある人間でした。

その自覚のもと、「全生涯が悔い改めである」と語ったルターの礼拝への情熱はほんものでした。たしかに彼は、古いラテン語ミサの式文や所作を完全に排除したわけではありません。しかし、会衆の母語によるドイツ・ミサの式文や、皆で共にうたう会衆賛美(コラール)の導入などは、たいへんな礼拝改革であり、それを支える「万人祭司」*の理念とともに、後代にまで影響を及ぼしました。

さて、1546年冬、生まれ故郷のアイスレーベンで息を引き取る直前に、ルターは詩編31編6節の言葉で祈ったと伝えられています。

“まことの神、主よ、
御手にわたしの霊をゆだねます。”

それは、彼が生涯愛してやまなかったイエス・キリストが、十字架上で最後に語った言葉でした(ルカによる福音書23章46節)。



スイスの宗教改革

スイスは言語によって4つの地域にわかれます。といっても、面積や人口が四等分という訳ではありません。当時と現代は多少違うかも知れませんが、統計によると、ドイツ語65%、フランス語23%、イタリア語8%、ロマンシュ語0.5%で、現在4つとも公の言語として認められています。

さて、ドイツで始まった宗教改革は、スイスでもまず北部のドイツ語圏で展開します。チューリヒでその指導者になったのが、フルドリヒ・ツヴィングリ (Huldrych Zwingli, 1484-1531←肖像) です。そして、後に南西部のフランス語圏で、ジャン・カルヴァン (Jean Calvin, 1509-64) がジュネーヴの改革を確立しました。この二重の流れを汲む教会が、ルター (ルーテル) 派に対して改革派教会とよばれるのです。

“私たちはまた、とくに神の国と、神の義を求めなければなりません[マタイ6:33]。
すなわち、神が義しくあられるように、私たちも義しくならねばならないのです。”

* コラム・宗教改革 *

キリスト教社会 (コルプス・クリスティアナム) の細分化

ローマ帝国の分裂 (395) ・西ローマ帝国の滅亡 (476) を経て、キリスト教界も、西方 (カトリック) と東方 (オーソドックス) の大分裂 (シスマ) を経験しました (1054)。その後西方 (中世ヨーロッパ) では、2・3人の法王が同時に立つ混乱時でも、「ひとりの王 (roi)、ひとつの法 (loi)、ひとつの信仰 (foi)」の原則が完全に壊れることはありませんでした。

福音主義がローマ教会から分離すると、同じ原則から、地区や領邦や都市は「旧い信仰」か「新しい信仰」かの二者択一を迫られます。1526年に家庭ごとの「信教の自由」を認めたイランツ村は例外でした。君侯ないし議会在「討論会」と「会議」を経て「真の宗教」を選ぶ時代となりました。結果として、「キリストの体なる社会」は血を流しながら、地域ごとの共同体に細分化しました。

ツヴィングリの生涯

1484年1月1日、「ウルリヒ」と命名され、のちに「恵み豊かに」を意味する「フルドリヒ」と自称することになるツヴィングリは、スイス・トッゲンブルク州の山あいの村ヴィルトハウスの比較的裕福な家庭に生まれました。本来素朴な農民の家系でしたが、祖父と父はその地方の役職についていました。彼は5歳の頃から聖職者であった伯父のバルトロメウスに養育され、後、バーゼルで学び、それからベルンの人文学校でヴェルフリンのもとに学びます。聖歌隊や複数の楽器演奏で音楽の才を発揮し、ドミニコ会士から入会を勧められましたが、家族が反対、ウィーン大学に入りました (1498)。ここで、哲学を中心に一般教養を修め、一説ではシュヴァーベン戦争に伴う政治活動のため退学させられましたが、のちに復学、さらにバーゼル大学に移り、神学を含む一般教養課程を修めました。在学中、教区学校で教え、人文主義者たちと交際し、スコラ的神学に対する興味を失いましたが、卒業まぎわに「恩師」ヴィッテンバッハ (1472-1526) の教えを受け、人文主義的思考方法を神学の分野に活かすこともできると知って、聖書中心的、また恩恵中心的思想にも眼を開かれました。

修士の学位を得て「マイスター」と呼ばれるようになった彼は、グラールスの司教館に招かれました。十年間の在職中、神学と人文学の研究を深め、古典ギリシア語を習得し、当時最も著名な人文主義者であったエラスムスとも文通しました。

* コラム・宗教改革 *

ツヴィングリの福音発見

1519年1月1日、ツヴィングリ35歳の誕生日にチューリヒ大聖堂で始まる『マタイ福音書』の第1回連続講解説教は、この町に「良い音ずれ」を響かせました。彼は20年後半までにルターの影響を受けましたが、それ以前に既に聖書に直接教えられ、福音を発見していたと主張し、独自の強調点も示しました。

ルターは、『ローマ書』前半や『ガラテヤ書』といったパウロの手紙から、「信仰義認」という「聖書を解く鍵」を発見しました。一方のツヴィングリは、『マタイ福音書』をはじめ新約文書全体から**神の国とその義、和解と愛の真理**の豊かさを確認します。福音の焦点は「信仰のみ」ではあっても「義認（の教理）のみ」ではないとも言えるように、彼は、信仰とは「キリストのみ」への**信頼**であり、実際に心身霊を明け渡すこと、義とされた者として御心に従い、御国の**共同性**に生きることだとします。彼は生涯、マタイ11章28節以下の言葉を愛しました。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。慰めてあげよう。……わたしの軛（くびき）は負いやすく、わたしの荷は軽い……」

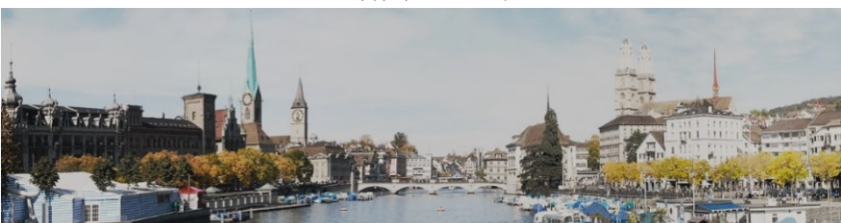
ツヴィングリによれば、福音は、悔改めを通して主の恵みを深く覚えさせると同時に、「**主に養われる羊の群れ**」としての共同体形成の約束を含みます。この改革者が教会や社会の**倫理**や**組織**を鋭く問うた根底には、この福音理解がありました。

エラスムスの平和主義に触れたツヴィングリは、**傭兵問題**にも関心を持ち、それに反対する歌や文書も書きました。彼自身、従軍司祭として三回にわたって教皇軍に奉仕し（1512, 13, 15）、戦争の悲惨を目の当たりにした経験がありました。傭兵問題とは、土地が狭く天然資源にも恵まれないスイスで、人口増加に伴い、青年たちが、いわば出稼ぎのように国境を越える「雇われ兵士」となったということです。ドイツ皇帝、フランス王、オーストリア大公、イタリアの大小都市国家がスイスの傭兵に頼りましたが、これを一番必要としたのはローマ教皇庁でした。青年兵の安定した供給を確保するため、それぞれの地方に年金が支払われたことは、スイス諸州の大きな財源となりました。

ツヴィングリはその後、アインジーデルンの司祭となり、聖書と教父の研究に励み、その聖書中心の明快な説教が評判となりました。彼は、ローマ・カトリック教会と完全には決別しないままに、大聖堂のあるリマト河畔の都市チューリヒに移り、教区民全体の牧会に責任を負う司祭として説教を始めました（1519）*。しかし、ここで思いがけなく**ペスト（黒死病）**に感染し、九死に一生を得ると、福音に生きることを召命と受けとめ、教会と社会の改革に力を尽くすようになりました。

彼は、断食規定を破る自由を擁護*（次頁）、教皇庁の支給する年金を自ら辞退し、1522年には**アンナ・ラインハルト**との結婚を発表しました（ルターの結婚はその三年後）。

1525年までにミサを廃止、会堂からオルガンや聖像を取り除いて礼拝様式を簡素化し、会衆を「みことば」に集中させました。チューリヒ大学神学部の前身となる教職養成機関「カロリーヌム」や聖書研究会「**預言（プロフェツァイ）**」を立ち上げ、川を挟んだ大聖堂〔↓写真右〕と聖母聖堂〔写真左、コバルトの塔〕でそれぞれ旧約・新約の共同翻訳（ルターのように個人訳でなく）を推し進めました。十分の一税は神の義でなく人間の義の問題として相対化しました。公共の貧民救済機関や婚姻法廷を整備、傭兵や対フランス同盟への反対など政治問題にも発言しました。



* コラム・宗教改革 *

ソーセージ事件～慣習と
儀式・構造からの自由

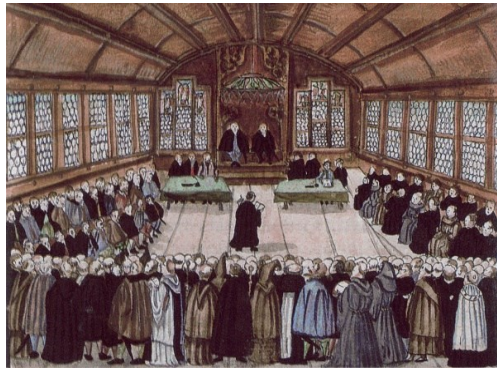
チューリヒの改革には、内面的な「律法と罪の法則からの自由（贖い）」だけでなく、教会が置かれた「**世の慣習や儀式の重荷からの自由（解放）**」という強調点もあります。ツヴィングリにとって、キリスト者の自由とは、「わたし（個人）の」自由にとどまらない、「わたしたち（共同体）の」自由でした。

このことは、チューリヒ市が改革を受け入れるきっかけとなった、1522年3月の「**ソーセージ事件**」に対する彼の姿勢にもあらわれています。

それは、イースター前の断食期間中の出来事でした。ツヴィングリの「**聖書に書かれていないことは禁じられている**」という聖書原理に共感する者たち10数名が、印刷業者クリストフ・フロシャウワーのもとに集まりました。そして、おもむろに2本のソーセージを切り分けて食べ、断食規定を破ったのです。

後にいわゆる「(再)洗礼派」と呼ばれる急進派は、この原則を徹底してここから分かれた者たちです。ツヴィングリの仲間から、暴力的な「聖像破壊」を断行する者も出てきました。

過激な改革とは距離をおきたいツヴィングリは、その場にいたものの肉を口にしませんでした。しかし彼は、この「犯罪」が公になると、「**食の自由な選択**」と題する説教を語ってただちに出版し、世俗を縛る慣習よりもキリスト者の自由を擁護しました。一時逮捕者も出ていますが、こうして世論を巻き込みながら、町の宗教改革導入の道が整えられました。



ルターの場合には、神学論争のために「九十五か条」を掲げながら、実際の討論会は開かれませんでした。しかし、ツヴィングリがチューリヒで「**六十七か条の提題**」を執筆したのは、市参事会（組合代表者などからなる市の議会）が求めた公の討論会に提出するためでした。結果、600人以上の討論会（図）で、ツヴィングリ側の大勝利が確認され、同市は正式に「**福音主義**」（プロテスタントの当時の呼称）を受け入れました。

ツヴィングリは、スイス諸州のうち福音主義諸州の同盟を結成しましたが、これが刺戟しげきとなってカトリック諸州も団結しました。互いに軍事的な準備を整え、戦争の緊張が高まります。ツヴィングリは、福音主義側が優勢であるうちに、一気にカトリック側を打ち破ろうとしましたが、敵同士であるはずのスイス人傭兵が陣営の境界線上でミルクスープを分け合うなど、平和的な趨勢におされ、カッペルでの決戦は回避されることになりました。この「**第一次カッペルの和議**」（通称「ミルクスープの和議」）は、なお福音主義側に有利な取り決めではありませんが、これは同時に、「**教皇主義者たち**」（カトリック軍）に体勢を立て直す時間を与えることになりました。ツヴィングリの活躍したドイツ語圏は、ドイツの福音主義とも関係が深く、ルター派との同盟が期待されましたが、そのきっかけとなるはずだった**マールブルク会談**（1529、次頁に図）では、聖餐式に関する考え方（聖餐論）でルターとツヴィングリが対立し、他のすべての事柄に関する神学的な一致にもかかわらず、両者は訣別することとなりました*（次頁）。最後にルターがツヴィングリと握手することさえ拒んだことは有名な逸話です。

こうして、スイスの福音主義陣営は孤立しました。ツヴィングリは、以前には自分が反対したフランスとの政治的提携をはかりましたが成功せず、カトリック側に先制攻撃をかけようとの策も受け入れられず、ついに第二次カッペル戦争のさなか、カッペルの野で戦死しました。旧新約そろったドイツ語聖書としてはルター訳に先立つ『**チューリヒ聖書**』公刊直前でした。

チューリヒの惨敗を知ったベルンが、ようやく腰を上げて大軍を送り、敵をその領内まで追撃したため、その後の和議も福音主義陣営にとってそれほど不利なものとはなりませんでした。この和議によって、スイスの宗教地図が固定化しました。

ツヴィングリの聖餐の神学

ツヴィングリというと、聖餐を単なる記号（サイン）とした人として、ルターと比べて否定的に受け止めている人が少なくないようです。しかし彼は、人文主義的な方法を用いて旧新約聖書を全体から説き明かそうとした人であり、用語の上で誤解された面があります。本当のところ、彼は聖餐の「秘儀」をどのように理解したのでしょうか。



“**菌とか胃袋とかはいったい何の役に立つのか。信ぜよ……キリストを信頼すること、それがパンとぶどう酒とにあずかることである**”（アウグスティヌス）

ルターが聖餐のパンとぶどう酒にキリストが「身体的に」現臨されると主張したのに対し、ツヴィングリの理解によれば、それらは主の体と血とを指し示す徴（サイン）であり、キリストはそこで「靈的に」臨在します。そこで「これはわたしの体である」というキリストの言葉を文字通りに受けたルターに対し、ツヴィングリは「これはわたしの体しんをしん示し唆さする（指し示す／意味する／象徴する）」と読むべきだと主張しました。ツヴィングリが聖餐を過去の単なる想起そうきにおとし貶めたと誤解する人が多いのですが、実際は、キリストを信じる（＝信頼する）ことにより、思い起こされた真理の出来事が、私たちのあずかる救いと確認され、感謝と具体的な共同性が生まれます。彼は靈に結ばれた教会の共同性に「キリストの体」を見ました。このような聖餐理解を、物質がキリストの血や体に変化すると主張したカトリックの「実体変化説」や、物質は変わらないが秘儀的にキリストの身体はどこにも臨在しうるとしたルターの「**遍在説**」に対し、「**靈的臨在説**」と言います。のちにはカルヴァンが、この説を受け入れたうえで、地上よりも、神の右に座すキリストの「天上での臨在」を強調しました。カルヴァンは、聖靈によって、むしろ私たちがキリストの座す天の食卓に引き上げられると考えたのです。ツヴィングリの後継者ブリンガーがこの考えを受け入れ、カルヴァンと共に「チューリヒ一致信条」（1549）に著名したことで、改革教会の一致の基礎が据えられました。なお、ツヴィングリの著作のうち、「六十五か条」「洗礼論」*「聖餐論」「牧会論」「キリスト教信仰入門」などは邦訳され『宗教改革著作集5／6』に収められています。

* コラム・宗教改革 *

新生児洗礼と洗礼派

「ここ…リマト川の真ん中で…1527年から32年の間に、フェリックス・マンツと五人の洗礼派が溺死させられた…」。

2004年、このように刻まれた記念碑が河畔に据えられました。メソジスト派など洗礼派の信仰を継承する人々を前に、宗教改革の負の側面を改革派教会として記念し、不寛容と暴力の歴史を悔い改めて、謝罪するためです。

新生児（嬰兒／小児）洗礼を聖書の根拠がないと拒否し、自覚的信仰理解をもつ成人に改めて「信仰洗礼」を施した人々は、「（再）洗礼派」と呼ばれ、カトリックからも福音主義主流派からも断罪されました。

ツヴィングリは1525年の「洗礼論」や多くの説教でこの問題を論じました。彼は、洗礼は旧約の割礼に比べられる「契約共同体のしるし」であり、主に従う人生を民に義務付ける「はじめの刻印」だと強調しました。それは、教えを受け悔い改めた者たちの救いと聖化と完全のしるしとした洗礼派の見解を否定するものでした。



* コラム・宗教改革 *

ロキ・コンムネス

神学という「学問の全体が総括され、すべての研究に目標と方向とを与える一定の基礎概念（ロキ）」として、メランヒトンは以下の表を挙げます。

神	恵みの果実
唯一性	信仰
三位一体	希望
創造	愛
人間、人間の能力	予定
罪	サクラメントのしるし
罪の果実、罪過	人間の状態
罰	官憲
律法	監督
約束	呪い
キリストによる刷新	祝福
恵み	

中世までの「スコラ神学」が神と御子の「存在論」を細かに思弁したのに対し、彼は「キリストの福音と恵み」の「救済論」に焦点を当てます。「律法、罪、恵み、すなわちキリスト認識」を中心にすえた彼の『ロキ』は、プロテスタント教義学に一定の基礎を据えました。

メランヒトンの生涯

フィリップ・メランヒトン（1497～1560）は、早くに父親をなくしました。選帝侯フィリップに仕えた武具職人の父シュヴァルツェルト（「黒い土」の意）から受け継いだ名を、人文主義の慣例にならってギリシア語に直訳し、メランヒトンと称するように^{うなが}促したのは、有名な大学者ヨハネス・ロイヒリンです。母方の大叔父にあたるロイヒリンは、語学に長けた甥の才能を早くから認め、その教育や、長じてからの学問研究に大きな影響を与えました。

ハイデルベルク（1509～）やテュービンゲン（1512～）で学び、16才という若さで学位をえたメランヒトンは、1518年、21才でヴィッテンベルク大学のギリシア語教授になりました。これは、ルターが95箇条の提題を掲げた翌年に当ります。メランヒトンは、この大学でルネッサンスの精神をもって講義し、大きな感化を与えました。彼はまもなくルターの支持者となり、ルターの思想を、より理性的な組織だったものとするために力を発揮しました。

1519年のライプツィヒ討論に際しては、ルターの馬車に同乗して会議に赴きます。そこで彼は、ルターをして「この小柄なギリシア語学者は神学においてさえも私を凌駕している」と言わしめる存在感を示しました。改革の転機となるルターの決断の背景に、彼の助言がありました。

1521年のヴォルムスの国会後、ルターがヴァルトブルク城に身を隠したため、メランヒトンは、期せずしてヴィッテンベルクの宗教改革の指導者になっていました。城内でのルターによる聖書翻訳作業にも協力したといえます。同年、彼の著した『ロキ・コンムネス』（神学要覧）は、福音神学最初の教義学といわれます。この本は、彼が持ち前の語学力を生かして大学で行ったロマ書講義を土台にして、その構成にならって執筆されました。この後、彼は聖書の翻訳と註解に努力を傾けますが、応じて『ロキ』の内容もまた、版を重ねるごとに充実します。

1529年のシュパイアー国会の際には、ルターが法律上代表者となれなかったため、メランヒトンが大きな役割を果たしました。さらに、同年のマールブルク会談においては、スイスとアルザスからの代表者たちとの見解の違いに苛立ちを隠せないルターにかわり、まずメランヒトンがツヴィングリと討論しました。

アウグスブルク信仰告白

2部構成で全28条からなるCAを概観しましょう。

第1部では、信仰の主要な条項が21箇条に短くまとめられます。ニカイア信条との一致点から説き、救いに焦点を絞った当の告白は、聖書と公会の教えに一致すると主張されます。

第2部では、教会間で分裂がある事柄、すなわち聖書に基づいて改善されるべき教義7項目が取り扱われます。

第22条 二種陪餐について
(パンだけでなくぶどう酒も会衆に配餐すること)

第23条 司祭の結婚について

第24条 ミサについて (キリストの死は一度限りであり、ミサの犠牲は繰り返さないこと)

第25条 ざんげ告白について
(人の赦しではなく神による罪の赦しが問題であること)

第26条 食物の区別について
(断食や儀式が償いとならず、むしろ重荷となっていること)

第27条 修道誓願について
(誓願は強要されず、潔癖な生活は人を義としないこと)

第28条 司教権について (司教権が剣と結びついてはならず、神の委託は福音の説教と聖礼典執行にのみあること)

以上、第2部は福音主義諸教会が一致して告白できる内容です。第1部は、当時のカトリックさえ異論のない内容ですが、例外は聖餐論でした。

第10条 「……キリストの真実のからだは血とは、晩餐におけるパンとぶどう酒の形態のもとにまことに現在し……」

メランヒトンは第2版以降、「現在」の言葉を削るなどして改革派に譲歩して公分母を広げ、仲間から批判されました。

1530年、メランヒトンが主となって起草された信仰告白が、アウグスブルクの帝国議会に提出されました。この「アウグスブルク信仰告白」(以下CA)*は、ローマ・カトリックとの決裂を避けようとする最後の努力として、福音主義の立場を表明したものです。その後メランヒトン自身は、改革派陣営との一致をも求めてCAを二度改訂しますが、折衷主義だと仲間から批判されました。そのため現在に至るルーテル教会の『信条集』には、CA1530年版が収められています。カトリック側は、450年もの間これを退けつづけますが、諸種の集会や出版が行われた1980年の記念祭では、CAの立場に賛同しようと表明しました。

1537年、メランヒトンはルター起草の**シュマルカルデン条項**に署名しましたが、もしこれが受け入れられるなら、教皇制を全否定せず聖書にしたがい改善することもできると考えていたようです。その後彼はルター派内外の論争で激しく攻撃され、悩まされながら、宗教一致に関する多くの挫折を味わいました。

晩年のメランヒトンは、ザクセンの教会を半監督制の上に建てることに力を尽くしました。それは本来、地区の牧師や信徒の間安と魂の配慮からうまれた制度でした。教区司教を退けるかわりに、地区を監督する**宗務局**が立てられ、その長の責任は、キリスト者である領主が、信仰に基づいて、「臨時司教」として担うべきだとされました。しかしこれが結果として、永続的な「**領邦教会**」の誕生に道を開きます。

「**領地が属する者に、宗教は属する**」(cuius regio, eius religio. つまり、領主は自らの領地内にひとつの宗教を、ローマ・カトリック教会かCAの教会から選ぶものとする)。このいわゆる「**信仰属地主義**」を表明した**アウグスブルクの宗教和議(1555)**もまた、当初暫定的な取り決めであるとされていました。しかし、ルーテル派が、神聖ローマ帝国内にカトリック教会と同等の立場を認められたことは画期的で、結果として持続するこの体制により、30年戦争の始まる1618年までの、平和的な均衡が保たれました。

さて、1517年から1555年まで、宗教改革の歴史全体の当事者であったメランヒトンは、1560年ヴィッテンベルクで死にました。その墓碑は今も、ルターのものと同様に、城教会に見ることができます。



(写真は諸版の『ロキ・コムネス』)

メランヒトンの学問的傾向

メランヒトンは、ルターなどよりも人文主義的であり、そのヴィッテンベルク大学教授就任講演は「青年教育の改善について」であって、非常に好評を博しました。「教養」とは何かに関心をもった彼は、その後も教育改革に大きな貢献をし、「ドイツの教師」と呼ばれました。彼が執筆した教科書は、神学だけでなく「ほとんどすべての他の知の領域」（ラテン語、ギリシア語、修辞学、弁証法、倫理学、歴史、人間学）にわたり、教派を超えて用いられました。

“キリストを知ることは、神の恩恵を知ることである。……キリストが肉をとり、十字架に付けられたのは何のためか、これを知らなければ、いったいキリストの歴史を知ったことがいかなる益をもたらすだろうか。”

* コラム・宗教改革 *

メランヒトンの最後の仕事

メランヒトンは、ある宗務局の要請にしたがい、自身の著作集のため「教義大全」（コルプス・ドクトリネ）を編纂します。そこで彼が選んだ自身の著作は、以下のとおりです。

1. 『アウグスブルク信仰告白』 修正版 (!)
2. 『弁証論』
3. 『ザクセン信仰告白』
4. 『ロキ』 最終版 (!)
5. 『教職審査』
6. 『バイエルンの宗教裁判所への返答』
7. 『スタンカロの教義に関する声明』

63歳の最後の誕生日に彼が書いた序文は、以下のとおりです。

「神は私にかくも豊かな恩恵を与えたので、キリスト教教義の大全を正式かつ明確に示そうと熱心に試みた、そして不必要で錯雑した論争は省略した。なぜなら論争もまた限度をもたねばならぬからである」。

メランヒトンの聖書註解は、人文主義の古典研究の方法を適用したもので、その方法論は聖書理解の「新しい道」と呼ばれました。これによって彼は、中世の解釈法を乗り越え、聖書言語の修辞学的研究や歴史の知識の必要なことを強調しました。とくに彼の『ロマ書註解』（1522年初版）は、ルターが発見した「信仰による義」を、解釈の鍵として論理的に基礎づけた「最初の宗教改革的なロマ書註解」として有名です。

ルターの弟子また協力者として出発した彼ですが、後には、教義学的見解に変化または発展があり、それは主著『ロキ・コムネス』の初版と後の諸版を比較すればわかります。とくにルター派の中で、彼の聖餐論がジャン・カルヴァンの見解に近づいたと非難する声があがり、フィリップ派とか、隠密カルヴァン主義者などと激しく攻撃されました。ただしマルティン・ルター自身は、見解に食い違いを生じた後も、一生変わらない友情を保ったということです。



(16世紀のエルベ河畔の町ヴィッテンベルク。左に城教会が見える)



* コラム・宗教改革 *

改革者たちの妻

バーゼルの聖マルティン教会牧師館に、あるプレートが掲げられました。改革者ヨハンネス・エコランパディウスの妻として「バーゼル初の牧師婦人」の一人とされるウィブランディス・ローゼンブラット（1504~64）を記念するものです。未亡人が独りで生きることが困難な時代であり、司牧者の結婚それ自体が「新しい信仰」の告白を意味した時代です。

彼女は、エコランパディウスと結婚する前の夫と死に別れていましたが、2人目の夫とも死別すると、次にカピトと、その後ブツァーと結婚しました。ブツァーにとっては2人目の妻でした。3人の改革者を含む4人の夫との子どもは計11名。ルターの心身の支えだったカタリーナ・フォン・ボラと並んで、新しい時代を切り開いた、記憶すべき女性の1人です。



マルティン・ブツァー（1491~1551）

シュトラスブルク（現ストラスブール）の改革者ブツァーは、1491年11月11日、シュレットシュタット（セレスタ）で生まれました。聖マルティンの日に^{ちな}因んで名づけられた経緯は、11月10日が誕生日のマルティン・ルターと全く同じです。父クラウスは桶職人、母エヴァは助産婦でした。この町のラテン語学校を出た後、ドミニコ会の修道院に入り、ハイデルベルクに移って（1517~）神学、ギリシア語、ヘブライ語を学びました。彼も他の大多数の改革者と同じくエラスムスの感化を受けましたが、ハイデルベルク討論（1518）でルターと出会い、その神学に感銘を受けます。それから紆余曲折の果てに修道会を出（1520）、在俗司教を経て着任していた宮廷司祭の務めから離れて結婚した結果（22）、自身も破門される身となりますが、その間に、ルターがヴォルムスに召喚されてついには破門宣告を受ける経緯も、直接目の当たりにしていました（21）。1523年に町を追放されたブツァーは、寛容の気風が息づく帝国自由都市シュトラスブルクに受け入れられ、この地に宗教改革を導入すべく尽力するマティアス・ツェル（1477-1548）の家に住んで共に働き始めました。同年には、ヘブライ語に堪能な人文主義者ヴォルフガング・カピトも宗教改革に参加することを決意し、この町に到来しています。

1525年以降、ブツァーはカピトと共に福音主義の礼拝規則を整え、29年にはミサを廃止するに至りました。

宗教改革者の間で、聖餐論の相違がだんだん明らかになってきた時、自身の聖餐論はツヴィングリに近かったのですが、ブツァーは常に改革者が神学的に分裂することを避けようとつとめ、妥協案を支持しました。そのため、時にはあいまいな表現を用い、ルターとツヴィングリの論争に対しても、一方を支持するよりも、両者を仲裁しようとして、ルターに非難されました。

アウグスブルクの国会（1530）では、ほぼルター派の見解に一致しましたが、「アウグスブルク信仰告白」には署名せず、会期中にツヴィングリの立場をも考慮した信仰告白をカピトと共に起草しました。これを、シュトラスブルク、コンスタンツ、メミンゲン、リンダウの各都市代表によって署名されたために、「四都市信仰告白」（コンフェッシオ・テトラポリターナー）と呼びます。

アウグスブルクに招かれなかったツヴィングリは、書簡で状況を知り、独自に『**信仰の弁明**』を提出しました。しかし結局のところ、皇帝は3文書とも受理しませんでした。3文書を比べると、プロテスタント諸派が基本的な教えを共有しながらも、当初から多様性をその特長としていたことがよくわかります。

さて、翌1531年にツヴィングリが戦死すると、ブツァーは、ライン川に結ばれたドイツ語圏の改革派諸教会の指導者として、さらに大きな責任を負うことになりました。

ブツァーの教会一致の努力は改めてメランヒトンに支持され、病中のルターをも動かして、「**ヴィッテンベルク協定**」（1536）が生まれます。ルターとブツァーは、聖餐論においては最後まで一致しませんでした。メランヒトンがヴィッテンベルク会談のために起草したこの協定によって、ルター派とツヴィングリ派の協定が成立しました。

また、ブツァーは、福音主義とカトリックとの合同のために開かれたハゲナウ宗教会談（1540）、ヴォルムス宗教会談（43）、レーゲンスブルク宗教会談（41）にも関係しましたが、多くは不成功に終わりました。

その後数年間、ブツァーはケルンの大司教ヘルマン・フォン・ビートを助け、かの地の教会規則に改革派の教理を組み入れようとしたのですが、これも成功しませんでした（1543~46）。

その後、シュマルカルデン戦争がおこり、シュトラスブルクもまたハプスブルク軍の脅威にさらされることになりました。ブツァーはカール五世が定めたアウグスブルク仮信条協定に反対を表明し、これに抵抗します（1548）。その結果、ルター派に接近する市参事会当局とも対立したブツァーは、1549年に解雇され、トマス・クランマーの招きに応じてイングランドに渡りました。

彼は、エドワード6世の治世下のケンブリッジ大学で神学教授となり、1550年には聖職按手式文を含む、教会改革・社会改革のプログラムを提案しました。とくに、真の教会の本質として、説教と聖礼典に加えて「**教会規律（信徒の訓練）**」を加えたことは注目に値します。

1551年、ブツァーはケンブリッジで死に、聖メアリ教会に葬られました。それは、カトリックのメアリ1世が女王になる2年前であり、死後の異端訴訟の結果、遺体が掘り出されて見せしめに火刑にされる5年前のことでした。しかし、1560年に再び時勢が変わると、女王エリザベス一世の下でブツァーは、名誉を回復されました。



* コラム・宗教改革 *

1530年の3文書

『宗教改革著作集14』から、アウグスブルクの国会に提出された3文書（「アウグスブルク信仰告白」・「四都市信仰告白」・「信仰の弁明」）に関する解説（石引正志、629頁～）の一部を読んでみましょう。

「……三文書の成立事情だけからでも、それぞれの性格の違いが想像されよう。すなわち、ルター派の文書は異端の容疑を晴らし、帝国内でカトリック派との共存を皇帝によって承認してもらうことを目指している。このためカトリックとの一致点を強調し、皇帝への忠誠において疑わしいとされる南ドイツ、スイスとの違いを明瞭にし、版肯定的態度の表明を努めて避けようとしている。シュトラスブルクを中心とする四都市は自らの独自性を保ちつつも、ルター派との接近の道を確保するために、ルターとの違いや批判を弱めて、教義的論議を避けている。これに対しツヴィングリは個人文書でもあり、さらにスイスの孤立が確定しているだけに、もはやマールブルク会談までのような遠慮を棄て、カトリック派、ルター派との対立点を明白に打ち出すことになる」

ここでは、現代にいたる教派間対話の難しさが、教理だけでなく、それぞれの地域の政治情勢の違いからも生まれていることが観察されます。



* コラム・宗教改革 *
回心は突然に？

「……わたしは教皇主義の迷信にはなはだかたくなに溺れ切っていたので、かくも深い泥沼からわたしを引き上げようとするのは、きわめて困難であったに違いないが、神は突然の回心によって……わたしの心を制圧し、これを従順なものに変えられた。こうして真の信仰をいくらかでも味わい知った……」
(1557年『詩篇註解』序文)

ふつう、「『寛容論』註解」には福音主義の信仰はあらわれないが、コップ演説は福音主義に立つ、だから、突然の回心はその二つの間に起ったといわれます。しかし、回心はコップの演説の翌年、教会祿辞退の少し前だと見る人もあります。あるいは、彼が神によって回心させられたと自覚して過去を振り返り、これまで予期していなかった神の人生への介入の力を知って、新しく神に従順な公の態度をとるようになった、とも考えられます。その意味では、福音主義に目が開かれる比較的長い回心のプロセスが「『寛容論』註解」より以前の学生時代から、神の導きとして存在した、と考える可能性もあります。

カルヴァンの生い立ち

1509年7月10日、ジャン・カルヴァンは、フランスのピカルディーの小都市ノワイヨンに、ジェラルド・コーヴァンの子として生まれました。コーヴァンをラテン語に直すとカルヴィーヌスとなり、それをもう一度フランス語にしてカルヴァンと呼ばれます。

彼の父は、ノワイヨンの司教館で公証人の仕事をした町の有力者でしたが、後に教会と衝突しました。

カルヴァンは、1523年パリに上り、パリ大学のラ・マルシュ学寮、ついでモンテーギュ学寮で学びました。前者には、近代的教育法の父といわれ、「その教えるところどこでも、文芸が花咲く」といわれたマチューラン・コルディエがおり、彼から典雅なラテン語を書くことを身につけました。カルヴァンのフランス語が、論理的な力と簡潔な美しさをもつ文体となったのも、コルディエをはじめとした人文主義教育の成果です。これに対し、モンテーギュ学寮は、保守的神学の王国でした。

1528年、教養学士となり、法律を学ぶためにオルレアンに行き、翌年、ブールジュに移って法律の勉強をつづけ、1530年に法学士となりました。この間、当時の人文主義者としての教養を身につけ、ブールジュでは、ルターに傾倒したドイツ人のギリシア語教師メルキオール・ヴォルマールをはじめ、福音主義の人々とも交わりました。

1531年、再びパリに出、翌1532年、最初の著作「セネカ『寛容論（寛仁論）』註解」を出版しました。

突然の回心

カルヴァンが、いつ福音主義の信仰を持つにいたったのか、どのようなきっかけで回心したのか。これは誰しも興味を持つ問題です。ところが、たくさんの著作を残したカルヴァンですが、自らの回心について記しているのは、『詩篇註解』の序文と「サドレトへの手紙」の二か所だけだといわれます。そこでも、「突然の回心」*があったと書かれるだけで、具体的なことは何も記されません。いずれにしても、次に述べる1533年のコップ事件を経て、34年までには福音主義信仰に立ち、12才の頃から受け取って来た教会祿を辞退して、カトリック教会と訣別したことは事実です。ここでは、カルヴァンが、あくまでも神を讃える目的以外では、自分のことを語っていないことを、とくに記憶しましょう。

コップ事件

1533年、カルヴァンの友人ニコラ・コップが、パリ大学の総長に選ばれ、11月1日カトリックの諸聖徒日に就任演説をしました。それは、イエス・キリストを中心にすえ、行いによらない信仰の光のもとで、「貧しい者の幸い」（マタイによる福音書の「山上の説教」）を説き明かす内容でした。この演説の執筆にカルヴァンがどれだけ関係したかは確認できませんが、その内容が福音主義であるとして大問題になり、カルヴァンも協力者として捕えられそうになったため、命からがらバーゼルに逃れました。バーゼルのカルヴァンは、多くの信仰深い人々が火刑に処せられる中、彼らを弁護したいとの願いをもって『キリスト教綱要』初版*を著し、フランス王フランソワ一世に献呈しました。こうして、彼もまた、改革の指導者として世に知られるようになりました。

第1回ジュネーヴ滞在（1536-38）

『綱要』初版の出版された年（1536）の夏、シュトラスブルクに向かったカルヴァンは、途中で政治上のいざこざに道を阻まれたため、大廻りしてジュネーヴに泊まりました。ところが、この都市の改革に踏み切ったばかりのギョーム・ファレルが彼を訪れ、ジュネーヴに留まって協力してくれるように頼みました。カルヴァンは、自分が旅の途中であること、勉強をつづけたいこと、体の弱いことなどを理由に断り続けましたが、とうとうファレルは怒って、「一体あなたは、神の召命に従おうとするのか、しないのか。……神は、あなたの平安と静かな研究を呪われるだろう」とまで言いました。この雷のような声によって、26歳のカルヴァンは神のみむねをさと、「わたしは神に従います」と答えます。

しかし、この町では、生活倫理の課題、ベルンとの緊張関係、市参事会との軋轢^{あつれき}などの問題が山積みでした。カルヴァンは「教会規則」「信仰の手引き」*、そして（ファレルを手伝い）「信仰告白」を起草し、町も一端はこれらを承認しました。しかし、毎月聖餐を執り行うとの主張などは、「戒規（陪餐停止／破門）」の厳しさに対する市民の反発ともあいまって、受け入れられませんでした。1538年、カルヴァンは、ベルン式の聖餐を拒否したかどで、ファレルと共に追放されてしまいました。

* コラム・宗教改革 *

『綱要』・『手引き』・『信仰問答』

カルヴァン最初のカテキズムは、1537年の『信仰の手引き』です。カテキズムとは、特に聖餐に加わろうとする者たちの信仰教育のために、教えをまとめたものです。『手引き』のように散文のものもありますが、次第に記憶しやすい問答形式が主流になります。

すでに36年にカルヴァンは、ルターの『小信仰問答』の形式に倣って『綱要』（*Institutio*）初版を著していました。『手引き』（*Instructio*）も同じ構造で、〈十戒（律法）—使徒信条—主の祈り—聖礼典〉を中心とした教えの精髓を要約します。内容にもルターの影響が見られますが、十戒の数え方など、後に改革派の伝統となる線もすでに垣間見えます。

分量が初版の3倍となる『綱要』第2版（39年）では、ブツァーの影響が顕著になり、ルターを離れる方向性が明らかになります。42年の『ジュネーヴ教会信仰問答』でも、ルター式の「律法から福音へ」の構造ではなく、「福音から律法へ」を表す〈使徒信条—十戒（律法）—主の祈り—聖礼典〉の順序が変わります。そして、59年に四巻本として完成する『綱要』最終版（〔写真〕）は、「神を知り、自己を知ること」（認識）の章に始まる点では初版から変わらないものの、多くの論争をふまえた体系的な「教義学」とでもいうべき書に成長します。





* コラム・宗教改革 *
みことばをうたう

ルターが導入した母語の会衆讃美を、カルヴァンはブツァーの教会で体験しました。当時のある若者が従兄弟に宛てた手紙に伝えられる、次のような感動を、カルヴァンも味わったことでしょう。

「日曜ごとに……僕たちはダビデの詩篇や、その他新約聖書からとられた祈りを……、男も女も共にみんなで歌います。美しく、聴けばいかにも美しく、声を合わせひとつになって歌う……それが、人々が互いに遠ざかることができない理由なのです。僕は、それがこれほどに喜ばしく、楽しくなりうるなどは、思いもしませんでした。はじめ……僕は涙を流したものでした。まったく、悲しみからではなく、亡命者を含む兄弟姉妹がこれほどに心をこめて歌うのを聴く喜びから、また……主が彼らを、その御名が崇められ、栄光に満ちているところに至らせてくださったことへの感謝をささげる喜びからです……」。

1538年、詩篇46篇を皮切りに自ら数篇を翻案するところから始めたカルヴァンは、翌年小さな韻律詩篇集を出版。その後はジュネーヴで、詩人クレマン・マロヤテオドール・ド・ペーズ、音楽家ロワ・ブルジョワといった多才な協力者と与えられ、ついに62年、全150の詩篇とマリアの讃歌、三要文、シメオンの歌を合わせた詩篇歌集の完成をみました。礼拝では単音で力強く、その他では多声で豊かに歌われ、器楽の編曲もなされました。こうして人々は夕に朝にみことばそのものを口ずさんで生きる喜びを知ったのです。

シュトラスブルク時代 (1538-41)

追放後、バーゼルに向かうカルヴァンを、今度はブツァーが、かつてのファレルのような強い口調で、シュトラスブルクに引き留めました。自分の思いに反する神の予定に屈服するように始まった滞在でしたが、ここでの三年間は、彼の人生最良の時期であり、改革の展開にも有益なものでした。

第1に彼は、ブツァーと深い親交を結び、この町を拠点として、ドイツ語圏の宗教改革にじかに触れました。フランス人亡命者教会（←写真は現在の教会）の指導と聖書講義を任せられたカルヴァンは、この町の政治や教育改革とも深いかわりをもつ共同体の神学から、新たに多くのことを学びました。

ジュネーヴを悩ませたカトリックの枢機卿に宛てた、福音主義の簡潔明瞭な弁明書『サドレットへの手紙』も、自身初の聖書註解で、特に優れた書と評される『ローマ書註解』も、この時代に生まれました。バーゼルのグリナエウスに献呈された本註解の序文から、カルヴァンが、ヴィッテンベルクのメランヒトン、チューリヒのブリンガー、そしてシュトラスブルクのブツァーとの対話の関係の中で聖書を読んだことがうかがえます。同時に、この時期のカルヴァンが、ドイツとスイスの諸都市を連ねる福音主義教会の一致に、なお強い希望を抱いていたことも分かります。

さて、この町でカルヴァンは、ペストで夫を失った、2人の子持ちのイドレット・ド・ビュールと結婚しました（1540年）。二人の間にも三人の子が生まれましたが、いずれも誕生後すぐに死にました。長男のジャックを失ったとき、カルヴァンは友人のヴィレに宛てて、こう書きました。「愛する息子の死によって、確かに主は私たちに大きな苦痛に満ちた傷を加えられました。しかし、主は私たちの父です。主は主の子どもにとって何が善かご存じなのです」。結婚後6週目の発病を皮切りにしばしば病気がちであった夫人は、1549年に世を去ることになりますが、その死の三か月後にカルヴァンがブツァーに宛てた手紙を見れば、彼が9年間の結婚生活でつちかった愛情の深さを知ることができます。「私は半身だけで生き残っております。なぜなら、最近、主は私の妻をみもとに呼び帰したもうたからです」。ここに、しばしば冷徹無常な指導者と誤解されがちな、「人間カルヴァン」（ストーフェール）の弱くも愛情深い^{なまみ}生身の姿があります。

第2回ジュネーヴ滞在（1541-64）

サドレットへの対応を見て、指導者不足のジュネーヴ市当局は、先に追放したカルヴァンを、今度は王者のごとく丁重に迎えようとしていました。カルヴァンは再三断りましたが、ついに神の召しを認めて帰還、以後、1564年の死に至るまで、同市の宗教改革のために尽くしました。

ジュネーヴの改革は、必ずしも容易ではありませんでした。しかし彼は、改めて「**教会規則**」（1541年）を定め、4つの職務と制度*を整えたうえで、全教会員の日常生活にいたるまで、厳格な改革と訓練を行いました。これに反対し、異なる教えに傾倒する敵対者も、カトリックあり、人文主義者あり、自堕落な生活に馴れた人々ありで、苦悩は絶えませんでした。

なかでもカルヴァンへの挑戦者として有名なのは、三位一体を否定し、ついには自らを天使ミカエルの僕と呼んだミゲル・セルヴェト（ミシェル・セルヴェ）でしょう。このスペイン人は、福音主義諸都市からもカトリック諸都市からも追い出され、告発されていました。一度カトリックの町で捕らえられ、脱獄した彼が、ちょうどカルヴァンが市参事会の反対者優勢の状況に頭を悩ませていた時期を狙って、ジュネーヴにやってきます。彼はこの町でも捕えられ、カルヴァンに断罪されたうえで、火刑に処せられました。カルヴァン自身はこの最も残忍な刑罰方法だけを変えさせようと努めましたが、うまくいきませんでした。

さて、ジュネーヴの町の標語は「暗闇の後に、光」でした。たしかに多くの敵対者が退いた後、「ジュネーヴはプロテスタントのローマ、カルヴァンはその教皇」と言われるほどに、カルヴァンの影響力が国内に広く及んだことは事実でした。しかし、一層深くなるルター派との決裂の問題、ベルン市との政治的な緊張などが相次ぎ、市はなお不安定な状況に置かれました。カルヴァンにとって、特に「身内」であるはずの福音主義陣営内の分裂は苦しいものでした。1549年には、ツヴィングリの後継者であるハインリヒ・布林ガーとの「**チューリヒ一致信条**」を結び、聖餐の一致にもとづく「**スイス改革派**」の土台作りをしましたが、かえってルター派との聖餐論を巡る軋轢は深まったのです。

* コラム・宗教改革 *

4つの職務と長老制

1541年の「教会規則」によって、カルヴァンは、牧師・教師・長老・執事を選ぶ方法を定め、週に1度の「牧師会」（コンパーニュ）による研鑽（けんさん）と、なにより「長老会」（コンシストワール）の教会会議制を、世俗の議会とは区別して整えようとしていました。4職のつとめは以下のとおりです。

○**牧師**：神の言葉の説教（宣教）、聖礼典の執行および（長老と共に）規律（かいぎ）の行使。週に1度の「牧師会」（コンパーニュ）に出席。

○**教師**：健全な教理による教育。高等教育に至るまで。

○**長老**：キリスト者の監督と訓戒、聖餐への出入りの拒否や追放にまで関わる週に1度の「長老会」（小会、コンシストワール）に出席。

○**執事**：貧者と病人への配慮。週に1度の会議に出席。

4職（あるいは教師なしの3職）の考え方について、カルヴァンは、ブツァーに多くを負っていました。シュトラスブルクでは、「教会集会」と「教会世話人」の制度があり、若いカルヴァンはそこから大いに学んだと言われています。



* コラム・宗教改革 *

カルヴァンの 講義・説教・註解書

1564年2月に行われたカルヴァン最後の聖書講義は、エゼキエル書によるものでした。ここに至る講義録が、いくらかではあれ65年までに、ラテン語とフランス語で出版されました。

「大学の講義にも匹敵する」と言われたカルヴァンの説教は、当時としてはめずらしく、その多くが保存されました。1549年から60/61年まで、執事会から委託を受けた速記記者ラグニエが、2000回以上の説教を清書までして残したからです。カルヴァンは、日曜朝には新約、午後には詩編から説教しました。また週日には、旧約の各書を説き明かしました。彼が、ツヴィングリの始めた「連続講解」の方法を採ったことが、後に改革派の説教の伝統として広がりました。

カルヴァンは、聖書を釈義して語るだけでなく、より詳細な修辭学的見地を踏まえた註解として書き遺しました。1536年の『ロマ書註解』にはじまり、死後に出版された『ヨシュア記』に至るまで（『サムエル記』と『黙示録』を除く）ほとんどすべての書に関する註解書が出版されており、彼が当代一流の聖書学者であったことが分かります。

1559年の最終版に至るまで、カルヴァンの主著『キリスト教綱要』は、上記のような聖書との絶えざる取り組みによって、「書きつつ進歩し、進歩しつつ書かれ」（序）ました。

カルヴァンの晩年と死（1564）

1549年創立のジュネーヴ学院には、後にカルヴァンの後継者となるテオドール・ド・ベーズをはじめとする数名の他、なかなか国外から招聘に応える教授がいない状況でした。しかし、急きょ政治情勢がかわったローザンヌから、ギョーム・ヴュデなど旧知の同労者が加わりました。カルヴァン自身も教壇に立ち、多くの学生たちを訓練しました（当時の学生が講義中に描いたと思われる「カルヴァンの似顔絵」の落書きが残されています。これが、日本キリスト教会の「カルヴァン・改革派神学研究所」のロゴ〔↓写真〕になりました）。牧師となった彼らは、各地の宗教改革のためにしばしば命をかけて帰郷しました。なお、自身亡命を経験していたカルヴァンの生涯は、フランスなどからの亡命者との関わりなしには語ることはできません。とりわけ、最晩年に彼が見た、ユグノー戦争（1562～）に至る一連の状況があります。1559年の第一回大会で、カルヴァンが起草した「ガリア（フランス）信仰告白」に固く立つフランス改革派のひとたちから、亡命者（宗教的な難民）がたくさん生まれていました。逃れくる人々を受け入れたジュネーヴの人口は、このころ急激に増えています。

さて、^{ひるがえ}翻って1556年以降のカルヴァンは、『綱要』最終版の完成（ラテン語59年、フランス語60年）にまで至る執筆活動と、その基礎となる聖書研究に、いよいよ命を削るかのようでした。病が悪化し、最後の講義、説教*を終え、ぎりぎりまで様々な集会に出席したうえで、死期をさとしたカルヴァンは、寝室に友人たちを集めました。そして、「あまりに激しい彼の感情を耐え忍んで」くれたことを感謝し、「公的にも私的にも、なさなければならないことと比べてほとんど何もしていない」ことを赦してくれるように頼みました。カルヴァンの遺言書の中では、わずかな遺産の分配と、墓についての言及に加え、「きわめて^{みじ}惨めな罪びと」だと自覚するその生涯に「度重なる神の忍耐があった」ことが告白されていました。こうして友人に別れを告げた日から、ちょうど1か月後の1564年5月27日、彼は54歳で逝去し、次の日埋葬されました。その墓地には彼自身の求めにより名前が刻まれなかったために、現在、その場所を知る者はありません。



* コラム・宗教改革 *



* コラム・宗教改革 *

スコットランドの殉教者

セント・アンドリュースの大学チャペル脇に、PHの文字があります。学生が、踏むと卒業にひびくと恐れる石のイニシャルは、1528年、そこで生きてまま火刑に処せられたパトリック・ハミルトンを記念するものです。同様に、お城の前の通りには、46年エディンバラで絞首刑となり、この地で見せしめに焼かれたジョージ・ウィシャートの、GWの文字が見られます。

ハミルトンは王族と姻戚関係にある貴族の出で影響力があり、ルター派の「ロキ」を思わせる著作と説教で改革を訴えました。

第1スイス信仰告白を英訳(36)したウィシャートは、スイスの改革者たちの線に立つ巡回説教で、ノックスを回心へ導きました(写真\右はその殉教の図)。留学や亡命を機に、彼らは大陸の改革者たちと出あっていました。大陸のカルヴァンは、亡命者と関わる中で、神の主権を支えとする「亡命者の神学」を深めていました。スコットランドの改革にも、始めから、亡命と殉教を背景に、神の主権と天の国籍のための闘いという側面がありました。

スコットランド宗教改革への道

グレート・ブリテン島北部に位置するスコットランドは、独立意識が高く、南のイングランドと常に緊張関係にあります。イギリスは現在、ブリテン島全体と北アイルランドによる一連合王国ですが、もとは別々の国でした。スコットランドは、対イングランドや対フランスの複雑な政治情勢の中、下からの改革運動によって長老主義の「国教会」が建てられた地域です。

もともと、スコットランドのピクト人にキリスト教が伝えられたのは、ローマ帝国時代、ブリテン人ニニアンによると言われます。ローマ軍がイングランドから撤退し、アングロ・サクソンの影響下におかれたブリテン島では、キリスト教が忘れられていきますが、ケルト文化圏アイルランドのキリスト教は、独自の歩みをしていました。そこから、「スコットランドの使徒」とよばれるコルンバが海を渡り、アイオナ島を拠点に、再びキリスト教を広めました(写真↓左はアイオナ修道院に残るケルト十字)。やがて、ケルトとローマの緊張関係を問題としたホイットビーの会議(664)以後、ベネディクト修道会の影響下で、ブリテン全体が次第にローマ・カトリック化されました。

スコットランドの宗教改革については、15世紀のウィクリフ(写真↓左から2番目)派の人たちの改革的活動から見なければなりません。その後ルターの宗教改革の波が押し寄せてきた時、スコットランドの議会は、ルターの著作の輸入を禁止しました。パトリック・ハミルトン(1504頃~1528年、写真↓3番目)は、パリに留学してルターの著作に接し、帰国後、信仰義認を説いたため、聖職者会議で異端とされ、火刑に処せられます。その殉教^{じゆんきやう}*の後、ジェームズ五世は伝統的政策を強化し、セント・アンドリュースの大主教ディヴィッド・ビートンは、更にプロテスタントの弾圧を進めました。しかし、プロテスタントは、貴族、地主、市民の間に浸透^{しんとう}し、ジョン・ノックスが亡命先より帰国した時には、その勢力は無視できないほどに増大していました。プロテスタント貴族たちは「契約」を行い(1557)、「みことばの維持のために生命をかけること」を約束しました。これらの貴族が、宗教改革戦争期(1559-60)には、改革派側の中核として活動します。



ジョン・ノックスの生涯 (1513/15-72)

ジョン・ノックスは、ハディントン郊外の農家に生まれました。1546年以前の前半生について、詳しいことは分かりませんが、セント・アンドリュース大学を卒業し、はじめは公証人をしていましたようです。46年頃、ジョージ・ウィシャートの教えを敬愛の念をもって聴いていた彼は、枢機卿ビートンによる師の処刑（*前頁）後の47年、かえってビートンが改革派の一部の者に討たれると、セント・アンドリュース城（写真→）の説教者となりました。

同年間もなくフランス軍によって城は陥落し、捕えられたノックスは、ガレー船で19ヶ月間労務に服しました（47-49）。釈放後、イングランドに生き、ベルウィックで牧師となり、最初の妻となるマージェリー・ボウズ（1560年逝去）と結婚。その後、ニューカッスルでの務めを経て、ヘンリー八世の後継者エドワード六世の宮廷牧師となり、ロンドンで礼拝式文の改訂に意を示しました。しかし、プロテスタントを残酷に迫害したことで「血まみれのメアリ」と後によばれるメアリー一世（テューダー）が即位すると、ノックスは迫害を逃れてフランスに亡命（54）、のちジュネーヴからフランクフルトへ、またジュネーヴに戻って、英人教会の牧師として活躍し、ジュネーヴ学院では「使徒時代以来のすばらしい教育」に、大きな感化を受けました（55-59）。その間、一時帰国し、宗教改革の進展のために努め（55-56）、大陸亡命中には、多くの著作も発表しています。とくに彼は、神のもとに与えられる**抵抗権**の思想を深めました。

さて、1559年に帰国すると、宗教改革戦争中は改革派側の説教者として活躍し、勝利の後には、エディンバラの聖ジャイルズ教会の牧師となり、カルヴァンの流れを汲む改革派教会の設立に力を尽くしました。60年、ノックスらが議会の求めに応じて4日間で起草した「スコットランド信仰告白」*が、^{ひじゅん}批准されました。一方の『規律第一書』は議会では否認されましたが、同年、6名の牧師と34名の長老による第1回大会（ジェネラル・アセンブリー、全国教会会議）を組織していた教会は、国の決議がどうあろうとも、この規律を教会の憲法として守ることとし、国と王に対する「信仰上の独立」（スピリチュアル・インディペンデンス）を明確にします。さらに2年後、大会は、教会の



* コラム・宗教改革 * スコットランド信仰告白

英国の信条文書という点、多くの人はウエストミンスター信仰基準（信仰告白と大小教理問答）を思い浮かべます。後のスコットランド教会も、ウエストミンスターを規則に採用しますので、当然のことです。

しかし、W・ニーゼル編の『神の言葉によって改革された教会の信仰告白・教会規律集』（1938）には、「スコットランド信仰告白」を採って、ウエストミンスターを入れていません。同時代、K・バルトのアバディーン大学におけるギフォード講演「神認識と神奉仕」（1938）も、この信仰告白に着目し、講解したものです。

ノックスの信仰告白の簡潔な「改革精神と命をかけた熱情」が、戦時中に再発見され、教会を、主権者たる神の認識に導いたことは注目に値します。

ここでは、第11条に、国や王の権威でなく、ただキリストに主権があると強調されること、第18条に、真の教会のしるしとして、①みことばの真の説教と②聖礼典の正しい執行と共に、③教会の訓練（戒規）が挙げられることを記憶しましょう。なお、その他の箇所からは、もともとカルヴァン起草の「ガリア（フランス）信仰告白」（59）やその影響下の「ベルギー（ネーデルラント）信仰告白」（61）との深い関係が指摘されます。



* コラム・宗教改革 *
ノックスと女王メアリ

“ひとつのミサは、一万人の武装敵兵が国土のどこかに上陸したときよりも、もっと恐ろしい”

エディンバラのセント・ジャイルズ教会の説教壇に上がったノックスは、女王に向かって高らかに「戦闘ラッパ」を鳴り響かせました。メアリ・スチュワートがホーリールド宮殿の礼拝堂で「個人的に」執り行わせたミサに、猛抗議したのです。

亡命時代(1558)には、女性に対する偏見さえ露わにししながら、メアリ1世やメアリ・スチュワートらによる「女性の怪物的統治」に反対する文書を発表していたノックスですが――後にはこの文書のせいで、プロテスタントのエリザベス一世にも嫌われます――ついに、直接対決に踏み出したのです。スペインやイタリアでのプロテスタントへの迫害は激しくなり、後のオランダ(アルヴァ侯の迫害, 67)やフランス(聖バルテルミの夜, 72)の大虐殺に向けて、憎悪が膨れ上がる時代でした。

女王と面会したノックスは、「宗教は君主からではなく、永遠の神のみに由来する」として抵抗権を主張し、教皇制とミサの問題を論駁しました。女王は「お前は手に負えない」といって感情を示し、両者の対立関係は決定的となりました。

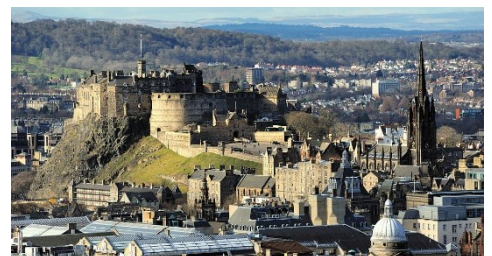
段階的な会議制(小会―中会―地方大会―全国大会)を整え、教会の管轄領域に関する問題で、国に上告することを禁じました。以後「信仰上の独立」の精神は、スコットランド教会史の画期^{エポック}ごとに、確認されることになります。

さて、この精神を体現する指導者がノックスでした。スコットランド女王メアリ・ステュアートが、帰国(61)後、表ではプロテスタントを優遇しながら、密かにカトリックのミサを行ったとき、ノックスは毅然^{きげん}とした態度で反対し、数回、女王に直接面会して諫^{いさ}めました*。

いずれメアリは失脚しますが、続く摂政時代になお重なる困難の中で、いかにノックスが、国家の権威を教会の上に置く「エラストス主義」と戦いつづけたかは、自身による『スコットランド宗教改革史』にも記録されています。

1572年、病気で世を去るまでに、ノックスは、その性格の大胆さ、力強さと純粹さにおいて、代表的な改革者たちと肩を並べる働きをしました。スコットランド教会史の中で、最も忘れがたい軌跡を刻んだ人物だと言えるでしょう。それにしても、ノックス自身は、自らの生涯や回心について多くを語らない人でした。回心については、彼が死の床で振り返り、「私たちが最初に^{いかり}錨をおろした聖書箇所を読んでほしい」と、妻マーガレット・スチュワートに求めたことが伝えられるばかりです。朗読されたのは、ヨハネによる福音書18章。そこには、イエスが、ゲツセマネでの祈りの果てに、裏切られ、十字架の道を進みゆく姿が描写されます。イエスの「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか」という言葉が、多くの血が流されたこの時代に、改革者を忍耐強く生かしたのだと思わされます。なお、彼が、最期まで自分の名が讃えられることを拒んだため、彼の墓には、「I・K・1572」と刻まれるばかりだったということです。

さて、その後のスコットランド宗教改革は、ノックス同様ジュネーヴに滞在した経験のあるアンドリュー・メルヴィルに引き継がれました。そして、摂政モートンの時代の「第二規律書」(78)、ジェームズ王時代のいわゆる「黄金法」(92)が、議会でも採択されるに至り、「教会の霊的統治」を実現する長老主義の国教会制度が整いました。



イングランドの宗教改革

ルターの宗教改革が、福音の再発見を原動力にしたものであり、カルヴァンの場合も、活ける神のみことばによる改革であったのに対し、イングランド（英国）の場合には、ローマ教皇庁の支配から独立するというのが、改革の主たる要因でした。そのため、カトリックの教会史家ビールマイヤーなどは、大陸とスコットランドについては「(宗教)改革」(リフォメーション)という言葉を用いますが、英国については「分裂」ないし「分派形成」という言い方をします。しかし、これを単に、王のわがまま勝手な結婚問題による変革だと見るなら、歴史の大きな動きを見落とすことになります。近代の国民国家が起こる時代に向け、国家と教皇庁の関係は改められる必要がありました。そのために英国教会では、何をもってローマと訣別するのか、あらゆる領域で問われたのです。

ヘンリー八世による分離政策

ヘンリー八世(1491-1547、在位 1509-47、写真左)は、ルターの宗教改革を批判する論文を書いて、教皇レオ十世から「信仰の擁護者」という称号をもらったほどに、教理に関しては親カトリックの王でした。

彼は6回も結婚をしますが、その最初の王妃は、アラゴンのキャサリンとあって、兄アーサーの妻だった人でした。3歳で婚約、16歳で年下のアーサーと結婚させられたキャサリンは、式後に夫が急逝すると、翌年ただちに5歳年下のヘンリーと再婚準備に入るように言われます。ローマ教皇も、神聖ローマ帝国皇帝カール五世(スペイン王カルロス一世)の叔母にあたるキャサリンとヘンリーの結婚を、特許状つきで認めました。明らかに、複雑で国際的な政治の利害にもとづく結婚でした。

18歳で王となり、実際にキャサリンを妻としたヘンリー八世でしたが、その後、6度の懐妊をへても跡継ぎとなる男児が与えられないと知ると、王妃の侍女アン・ブーリン(写真右)との再婚を求めます。彼は、キャサリンとの結婚は聖書(たとえばレビ記 20:21)にも教会法にも適わないものであり、神の怒りを恐れて無効とすべきだと主張しました。そして、教皇の反対にもかかわらず



* コラム・宗教改革 *
スペイン、フランス、
そしてブリテンの二国



* コラム・宗教改革 *

16世紀英訳聖書の歴史

1523年ティンダル聖書

1535年カヴァーデイル聖書

ティンダル未訳の部分のマイルス・カヴァーデイルがラテン語とドイツ語聖書から翻訳。

1537年マシュー聖書は"トーマス・マシュー"という偽名を使ってジョン・ロジャーズが出版。ティンダルの挑発的な注釈が取り除かれていたため、かつてはティンダル聖書を禁止したヘンリー八世はこの聖書を認可しました。

1539年タヴァナー聖書はマシュー聖書のマイナー改版。

1539年大聖書として知られる聖書が、ふたたびカヴァーデイルによって翻訳され、教令に沿って発行されました。

1546年には、大聖書以外の翻訳聖書が焚書とされました。

エドワード6世の摂政サマセット公は聖書の翻訳出版の規制を緩め、部分訳も含めると50近くの翻訳聖書が6年の間に現れています。

1560年ジュネーヴ聖書完成。後年、エリザベス1世の元で大聖書に取って代わることになり、エリザベス時代に60版が出されています。節番号をつける方法を確立。

そして、ジュネーヴ聖書の注を吟味する形で始まった新訳が1611年、ジェームズ王欽定訳聖書として完成します。

〔以上御執筆分/便宜上 Wikipedia から引用しています〕

ヘンリー八世は結婚を強行した(1533年1月)のです。カンタベリー大主教トマス・克蘭マー(写真左)も王を支持し、このたびの結婚の有効宣言(同5月)をしました。

とにかく、ことは複雑で面倒でした。しかしながら、この問題をきっかけにして、世俗の権威と霊的な権威を神の僕である王に帰すことを決めた英国教会は、ローマと手を切ることになりました。

具体的には、王の右腕となったトマス・クロムウェル(写真右)によって、上からの教会改革が推し進められました。1533年2月にはイングランド宗教改革の土台となる「上告禁止法」によって、聖職者に対する立法権・裁判権が、英国王に移されました。教皇庁の収入源だった修道院の財産が差しおさえられ、ローマへの献金も禁止されました(34年「赦免法」)。決定的だったのは、1534年の「国王至上法」(首長令)です。王は「英国教会の地上唯一最高の首長」とされ、修道院と聖職の巡視権(問安・視察と監督・懲罰の権利)を得ます。修道院を手にした王の財力は強化されました。王は、6つの大聖堂を^{こんりゅう}建立し、オックスフォードとケンブリッジの^{きんていこうざたんとうきょうじゆ}欽定講座担当教授を創設、ケンブリッジにトリニティカレッジを創りました。

1536年、聖職者会議は「十箇条」を受け入れました。これによって、英国教会の sacrament は「告解、聖餐、洗礼」の3つに絞られました。聖餐理解はルターに近づき、反ローマの傾向がはっきりしましたが、^{れんごく}煉獄の教えやミサの伝統など、従来の教理も残されました。

この後、ルター主義への保守派の反動がふくれ上がり、クロムウェルは異端として処刑されました(40)。教理上はカトリック支持者であった国王は、あらたな結婚をして保守派をまとめ、克蘭マーとクロムウェルの『主教の書』(37)にかわる『国王の書』(40)をつくらせました。これは、信仰義認の教えに行為義認の主張をつぎはぎしたようなものでした。ヘンリー八世は、1547年、煉獄での魂の平安を求めながら、死にました。

後継者エドワードが未成年のため、伯父のエドワード・シーモアが摂政となります。彼の時代には、煉獄の教理が退けられ、「礼拝統一法」により英文の『第一祈祷書』が制定(49)されるなど、教理上の改革が進展しました。こうして、「ピューリタン王エドワード」の時代が備えられたともいえます。

「ピューリタン王」エドワード

次に王位についたエドワード六世（1537-53、在位 1547-53、写真左）は、ヘンリー八世の三番目の妃ジェーン・シーモアの息子で、9歳で即位しました。彼は英国唯一のピューリタン王とよばれ、聖書の研究に励み、カルヴァンから直接、励ましや勧告、著書の献呈を受けました。また、克蘭マーの招きでケンブリッジ欽定講座教授となったブツァーが改革派路線の講義を行うことを許しました。この時期の大陸（改革派神学）の影響は、とくに『第二祈祷書』（1552）顕著です。ただし、改革者たちから「若きヨシヤ王」とよばれたエドワードも、若くして死んだため、改革の実りはこれ以上のものとはなりませんでした。

メアリー一世の時代

次が、メアリー一世（1516-58、在位 1553-58、写真右）です。彼女は、ヘンリー八世の最初の妃キャサリンの娘で、前に述べたように「血まみれのメアリ」とよばれるほど、激しく福音主義を迫害し、克蘭マーをはじめ火刑に処した者だけでも300人におよぶといわれます。夫はカール五世の王子フェリペ（後のスペイン王）で、夫婦それぞれ英国の再カトリック化に尽力します。多くの亡命者が大陸に流れました。

ここに、英国教会宗教改革がはじめから抱えていたジレンマ*が際立つということができるよう。先王の時代には、聖書の権威にもとづいて、改革派の路線で推し進められた改革が、教皇主義のメアリー時代には、至上権をもつ女王や外国から介入する権力者の宗教政策と、真っ向から対立してしまうのです。英国教会の歴史は、この後のエリザベス時代を始めとして、この問題に対する取り組みの歴史だと言っても過言ではありません。

エリザベス一世と英国国教会

次に王位についたエリザベス一世（1533-1603、在位 1558-1603）は、ヘンリー八世の第二の妃アン・ブーリンの娘です。アンは男子を産まないため、潔白であるにもかかわらず、姦通その他の汚名をきせられて死刑にされました。ですから、エリザベスは幼い頃から苦勞に耐え、異母姉メアリー一世の治下では、生き残るためにカトリックを装わなければなりませんでした。



* コラム・宗教改革 *

克蘭マーのジレンマと 改革主義の亡命者教会

エドワード王時代の克蘭マーは、ブツァーのほかに、イタリア出身のペトルス・マター・ヴェルミーリや改宗ユダヤ人イマヌエル・トレメリウス、あるいはポーランド貴族出身のヨハネス・ア・ラスコ（ヤン・ラスキ）といった、さまざまなルーツを持つ「改革派」の神学者を英国に招聘しました。改革を前進させたい王は、特許状を与えて彼らを助けます。改革者たちは、英国でも自立した存在感を示し、かえって国教会に影響を与えました。

たとえばア・ラスコは、市民権を得たうえで「ロンドン外国人亡命者教会」の監督となり、国教会とは異なる「教会規程」の採用さえゆるされました。特筆すべきことは、これが長老・執事の複数職務を採る長老制度を採用した、最初の教会規程だといわれることです。また、この教会形成の具体性の中で、彼は、カトリックだけでなく、英国教会の伝統的儀式や祭服、画像をも拒否し、ピューリタンの神学にも影響を与えました。

克蘭マーは、すでに1530年代から大陸の改革者に傾倒していましたが、50年代のこうした実例からも改革派神学を知りました。王の権能から自由な教会形成を具体的に知るほどに、彼はジレンマを覚えなかったのでしょうか。



* コラム・宗教改革 * 祭服論争とピューリタン

エリザベス一世の時代以降、英国教会の教養人から「ローマのパン種」を清めようとするピューリタン（清教徒）の運動が起こります。この運動は、「祭服論争」（1559年-）をきっかけに、エリザベス一世の時代に表面化したものでした。

聖書によれば、礼拝時の服装は「どちらでもよい」（アディアフォラ）事柄なのでしょう。そうだとすると、どちらを選ぶか誰が決めるのでしょうか。この問題は次第に鎮静化され、祭服は残ります。しかし、教会の主権をめぐる問いを鋭くし、より「清い」（ピュアな）教会形成を求める声が、教会内外の説教や大学の講義に絶えることはありませんでした。シェークスピア劇などで熱狂主義と脚色されるピューリタンですが、実際には出版や討論をへて着実に支持層を広げ、議会下院で主導権を握るほどになります。

その後、オリヴァー・クロムウェル（1599-1658）のもと、ピューリタン革命が起り、国王チャールズ一世を斬首刑に処し（1649）、清教徒を中心とする共和制が布かれました。政治も社会生活も、聖書に照らし信仰に徹した清く正しいものとなる努力がつけられましたが、やがて王政復古（1660）となり、宗教改革期がおわります。

エリザベスが王位に着くと、国内はなおカトリック的な典礼を続けていましたが、メアリ時代の亡命者の帰国とあいまって、以前のカルヴァン主義的な傾向が息をふきかえしてきました。メアリー一世の治世にロンドン塔に幽閉された経験もあるエリザベス自身は、強く反ローマ的でしたが、同時にカルヴァン派の簡素な礼拝と反王制的な制度を好まず、中道（ヴィア・メディア）を歩む英国国教会の立場の確立につとめることになりました。

英国国教会の特色

英国国教会の特色は、次のようなことです。

1. **首長令** 英国教会の地上の首長（ヘッド、後に統治者〔ガバナー〕）は、王です。ヘンリー八世に与えられた「信仰の擁護者」という称号は今日まで継承されています。

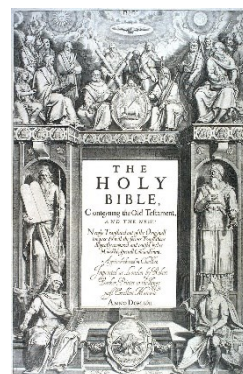
2. **統一令** 最初エドワード六世によって定められ、後、改廃をくり返しましたが、法令によって、祈祷書の使用を全国の教会に強制的に求めました。

3. **祈祷書** 現行の祈祷書は、1662年に定められたものですが、教会歴、聖書・詩篇日課表、早祷、晩祷、聖礼典、公開問答、諸儀式、信仰生活の指針を含んでいます。

4. **三十九箇条** 英国教会の教理の規範は、1571年の「三十九箇条」です。聖書にもとづいて、ローマ・カトリックとの違いと、プロテスタントとの違いを述べています。

5. **使徒伝承と三職制** 英国教会は、真の教会の要件として、使徒伝承と、監督・長老・執事の三段階の職制を主張します。

6. **欽定訳聖書** 時代からすると、以上の五項と並べるべきものではありませんが、ジェームズ一世の命令で47名の聖職者・学者が協力して、1611年に完成したのが、欽定訳聖書です。英語では、オーソライズド・ヴァージョンとも、キング・ジェームズ・ヴァージョンともいわれ、英文学としても最高の作品と称されます。



なお、現代の「聖公会」（アングリカン・コミュニオン）は、「英国国教会」より広い概念で、世界中に広がり、かつカンタベリー大主教と結ばれた教会を指します。